

## 我が国綿織物業発展の契機

—これまでの研究に対しての再考—

### On the Motivations of the Japanese Cotton Textile Industry in the 19th Century

-Rethinking the Studies-

吉 田 一 郎  
Ichiro YOSHIDA

---

明治維新から150年を迎える。我が国の近代化は、この明治維新によって封建制度が打破されると同時に欧米の先進国から進んだ技術を導入することによって達成したと考えるのが通説的な理解であるとされてきた。欧米の進んだ技術を導入することが急速な近代化を推し進める要因であったと考えられてきた。

速水融<sup>(1)</sup>氏などによって江戸時代は、比較的経済が進んだ段階であったとする見解がある。封建制度から資本主義に移行することを歴史法則のように考えてきた戦後史学に対しては、有効な批判となったといえよう。

我が国が欧米の進んだ技術を導入したことは、確かである。アレキサンダー・ガーシェンクロン<sup>(2)</sup> (1904～1978) によって「後発国の優位性」が提唱された。これはいわゆるガーシェンクロン・モデルとして著名である。このモデルは、明治維新の工業化においても当てはまる事例と見做されてきた。実際、我が国の明治維新は、欧米先進国から破格の待遇で技術者や教員などを雇い入れて我が国の産業の育成や高等教育機関での指導をおこなわせた。これは、「お雇い外国人」として著名である。また、多くの優秀な若者を欧米先進国に留学させ欧米の進んだ技術や制度を学ばせたことも我が国の近代化に貢献したことも事実である。速水氏などによって実証された江戸時代の経済状況が比較的高かった事実は、欧米の技術などを受け入れやすい環境があったと考えることもできる。我が国は、欧米先進国の技術を短期間で習得しやすい状況であったと言えよう。

また、近年、有力な経済史家、中村尚史氏は、「日本における鉄道業の急速な発展は、A.ガーシェンクロン (Alexander Gerschenkron) が提起した『後発性の優位』というモデルである<sup>(3)</sup>」と述べた上で明治の鉄道業に関して論じている。ほぼ、明治時代をかけて全国的な鉄道網が完成するが、これが可能であったのは、欧米先進国の技術をフルに活用することが可能であったためである。

近年では、東南アジアの経済成長は、著しい。ここでは、ガーシェンクロン・モデルは、キャッチアップ理論として利用されているようである。

しかし、明治以降の我が国の経験もまた、ガーシェンクロン・モデルの一例としてこれから経済成長を遂げようとする国々にモデルとして提示してよいのであろうか。

杉原薫<sup>(4)</sup>氏は、19世紀のアジア間貿易に関して綿業においてアジア間貿易は拡大していること

を実証している。

また、川勝平太<sup>(5)</sup>氏は、欧米とアジアの綿業では品質に大いに相違があり競合関係が希薄であると主張した。川勝氏によると東アジアの綿花と欧米が利用していた綿花は、短繊維綿花と長繊維綿花でそれぞれ異なっていた。東アジアで使用された短繊維綿花から太糸を紡ぐことができ、それを織ると厚地布が生産されるのに対して、欧米で使用された長繊維綿花からは、細糸を紡ぐことができ、そこからは、薄地布が生産される。このように両者は、余り競合しない製品であると川勝氏は、それまでの通説とは、反対の結論を出した。氏はもし、かりに両者が競合していたら、産業革命を終えたイギリス綿業に我が国の綿業は到底、太刀打ちすることはできなかったであろうと述べている。

このように東アジアには、欧米とは異なる綿製品の市場が存在していたのである。

ガーシェンクロン・モデルは、普通、後発国が先進国に追い付いていくキャッチ・アップ理論として用いられている。日本以外のアジアの経済発展は、80年代から始まり85年のプラザ合意以降、本格的となり、また、近年では、東南アジア諸国などアジアの国々の経済成長が著しく、ガーシェンクロン・モデルはこの地域に当てはまるように思える。しかし、ガーシェンクロンがこの理論のもととなる「歴史的観点から見た経済的後進性<sup>(6)</sup>」を発表したのは1952年である。この時代のアジアは、第二次世界大戦が終結し、植民地から独立したばかりであり、後発理論などは、あてはまるはずもなかった。

我が国では、60年代に中川敬一<sup>(7)</sup>氏によってガーシェンクロン・モデルは紹介された。80年代以降、渡辺利夫<sup>(8)</sup>氏や末廣昭<sup>(9)</sup>氏などの開発経済学の専門家によって利用された。

ロシア系のアメリカ人であるガーシェンクロン氏は、当時、アメリカのライバルとなりつつあった彼の祖国、ソビエト連邦の経済成長をこれにあててはめようとしたようである。強力な軍事・経済大国として東側、社会主義国を従えアメリカに対峙したソビエト連邦(1917～1991)の出現をガーシェンクロン氏は、説明しなかったようである。つまり、後発国になるほど工業化のスピードは増大する。民間部門ではなく、政府部門が主導権を握る「上から」の工業化が必要となる。ロシアの工業化こそが後発国の典型例とされたのである。

ガーシェンクロン・モデルは、おもにロシアの工業化についての考察の結果、考え出された理論であるといえる。そのため、当時においては、ロシア、同様後発経済国であり、迅速に工業化に成功した日本の工業化を分析するのに格好の理論となったのであろう。

周知のようにソビエト連邦でペレストロイカ（改革開放）をスローガンとしたゴルバチョフ書記長の出現や1989年のベルリンの壁の崩壊をみて、社会主義体制は、崩壊し、ソビエト連邦も解体した。

全体主義的な国家体制の崩壊後、ロシアにおいてそれまで、マルクス・レーニン主義でしか研究が認められなかった体制が終わった。ソビエト連邦下では、史的唯物史観により、1860年の農奴解放までは、封建主義、農奴解放以降、1917年のロシア革命までは、資本主義、ロシア革命以降は、社会主義と捉えるような歴史観しか認められていなかったのである。

しかし、ソビエト崩壊後は、自由な学問が認められるようになった。新しい研究潮流に従った研究がおこなわれるようになった。

ソビエト崩壊後の新しい研究潮流などを踏まえてロシア経済史家、塩谷昌史<sup>(10)</sup>氏は、ロシアの綿業発展について精力的に研究している。塩谷氏は、これまで、ロシアがイギリスなどの先進国の後発国であるとされてきた通説に対して疑問を提示されている。

産業革命の成功によりイギリスが最初に工業化した。工業化の技術は、ロシアのような後進ヨーロッパ諸国に伝播していく。つまり、ロシアはイギリスの後発国であると説くことに何の疑いもなく、まさにガーシェンクロン・モデルがあてはまっていたのである。イギリス産業革命は、1760年頃始まり、1830年代初頭くらいに完成したとされる。それに対してロシアの工業化は、19世紀の終わりである。イギリス先進国、ロシア後発国と考えることが当然のこのように考えられてきた。ここでは、イギリスの成果がそのままロシアに伝播したと見なされており、これが正しければガーシェンクロン氏の主張通りになる。

ソビエト崩壊後の史的唯物史観に捉われない研究に影響を受けた塩谷氏はロシアの綿業について通説と異なった主張をしている。以下氏の研究を取り上げ、ロシア同様に後発国とされてきた我が国の経済成長との関連性を考察することにしたい。

19世紀後半の工業化が本格的に始まる前のロシアでは19世紀前半に萌芽的な成長がみられる。この時期、ロシア綿織物業は、国内市場に供給されるだけでなく、アジア市場にも輸出されたが、ヨーロッパには輸出されなかった。ロシアはヨーロッパに比べて後発工業国と位置付けられ、ロシア製綿織物がヨーロッパに輸出されなかった事実が焦点が当てられた。ロシア製綿織物は、ヨーロッパ製綿織物よりも質的に劣るため、ヨーロッパ市場に輸出することはできず、後進地域であるアジアにのみ輸出されたのであると考えられてきた。

塩谷氏は、このように通説が説明するように番手という基準で比べればヨーロッパの方が優れていたと考えることができるとした。しかし、アジア市場でロシア製綿織物が受け入れられてきたことについては、説明ができないと疑問を投げかけた。つまり、ヨーロッパ綿製品もロシア綿製品もアジアにおいて競合するはずであり、通説のようにヨーロッパ綿製品が優れているのであれば、ロシアは、アジア市場に参入できないはずである。そこで、塩谷氏は、これまで検討されてこなかった、ロシア綿製品は、アジア市場になぜ、参入できたか<sup>(11)</sup>に注目した。

原料となる綿花の生産は、温暖な地域でなければできない（我が国でも基本的には東北地方の南部より北では、生産ができない）。ヨーロッパでは、生産が不可能であり、したがって寒冷なロシアでは原綿の生産は、できないので、どこから輸入して、紡糸から織布にいたるまでの工程をおこなうことになる。もっとも19世紀後半となるとロシアは中央アジアを併合することになるので、自国での綿花の生産は可能になる<sup>(12)</sup>。

ロシアが綿織物製品を最初に輸入したのは16世紀であり、西ヨーロッパではなく、中央アジアやペルシャである。16世紀以降、アジアからの綿製品がロシア国内に流入した。17世紀になるとアジアから綿糸を輸入し、その綿糸を織布し、捺染することで国内での生産が始まる。18世紀半ばにはヴォルガ川の沿岸地域でアジアの輸入綿糸を原料として織布業と捺染業が発展した<sup>(13)</sup>。

しかし、18世紀末には技術革新により安価な綿糸と綿織物を生産できるようになったイギリスから大量にこれらの製品がロシアに輸出されるようになる。1790年ごろまでは、おもに中央アジアから綿糸が輸入されていたが、代わってイギリスから綿糸が輸入されるようになった<sup>(14)</sup>。

ロシアの貿易構造は、通説では、西ヨーロッパに対しては後進国型貿易構造、アジアに関しては先進国型貿易構造として捉えられてきた。西ヨーロッパより工業製品を輸入し、アジアに対しては、反対に、工業製品を輸出するという対照的な特徴を示していた。これは、一見すると近年に至るまで我が国経済を論じてきた研究とほぼ同様なようであると言えよう。

我が国でも通説に対する批判があるように塩谷氏は以下のように論じて、ロシアにおける通説を批判<sup>(15)</sup>する。ロシアのアジア市場への輸出は、①ペルシャ・オスマン帝国、②中央アジア、③中国であるが、ロシアが輸出を伸ばしたのは、②中央アジアである。

中央アジアに対してロシア綿織物は、19世紀前半から輸出を伸ばしていた。しかし、イギリスもロシアに遅れて進出してくる。イギリスは、インドの植民地化を進めており、カシミールやアフガニスタンまでその勢力を拡大している。つまり、中央アジアへの拠点を持っていた。また、イギリス綿業が中央アジアへの進出を始める1830年代は、ロシアはイギリスから綿糸を輸入している段階であり、ロシア綿業とイギリス綿業との生産力は比較にならなかった。ロシア綿製品はイギリス綿製品と価格競争をした場合、敗北するように思われたが、実際はイギリスの勢力圏であるインドやアフガニスタンから山脈を越えて中央アジアに商品を運ぶことは、相当手間がかかったようであり、イギリス製品の価格がロシア製品の価格より高価であった。ようやく1840年代になるとイギリス製品はロシア製品より低廉になる<sup>(16)</sup>。

40年代、50年代とロシアの綿製品はイギリス綿製品の進出のため中央アジアで減少していくが、壊滅的な打撃を受けることなく、一定程度の輸出を維持する。この理由に対して、塩谷氏は、次のように分析している<sup>(17)</sup>。英国製とロシア製の綿織物市場は、複数存在している。ロシアが打撃を被ったのは、綿織物の中でもモスリンであったが、更紗は打撃を被らなかった。モスリンは中央アジア諸汗国でイスラム教徒の男性が頭にターバンを巻く習慣があり、そのターバンは、モスリンを布地としていた。英国モスリンは高番手綿製品であり、ロシア製のモスリンは品質面で劣っていたので販売市場を失った。しかし、ロシア製の更紗は、英国製品の影響は受けずに、安定して成長した。現地では、英国製の物よりロシア製の更紗を好んだのである<sup>(18)</sup>。

1850年代以降になるとロシア製品に対する英国製品の影響は見られなくなる。つまり、ロシアは高番手のモスリン市場では、先進工業国イギリスには、太刀打ちできなかったが、一方で、更紗市場においては、イギリス産に打ち勝って、ロシア産の更紗が受け入れられたのである<sup>(19)</sup>。

なぜロシアが工業化に成功したのか？という問いへの解答は。従来考えられてきたように先進国にキャッチ・アップするためであるとする考えは、「歴史事実の半分のみを説明したに過ぎない<sup>(20)</sup>」のであると塩谷氏は述べている。

もう半分の解答は、ロシアが憧れた中央アジア産の赤更紗を輸入代替化したいと望んだことが工業化の要因であった。ロシアは憧れていた中央アジア産の赤更紗を3世紀かけて輸入代替化に成功し、

18世紀より中央アジア市場へ反対に輸出していくのである。捺染技術は、化学的、知識を必要とし、19世紀初頭のナポレオン戦争によるフランス人捕虜より先進国フランスの捺染技術を学んだり、あるいは蒸気機関なども利用していくことになる。捺染・染色工程における化学知識の利用や、織布工程やローラー捺染機などにおける蒸気機関の利用などを西ヨーロッパ先進国から技術を借用することによって輸入代替化されたロシア更紗が中央アジア市場にイギリス更紗に打ち勝ち流入したのである<sup>(21)</sup>。

イギリスはロシアより先進工業国ではあるが、ロシア綿業は、蒸気機関や捺染・染色における化学の知識を借用したがロシア人が憧れていた中央アジア産の赤更紗は、別の商品である<sup>(22)</sup>。つまり、ロシアは、イギリスとは異なった商品を製造していたと言える。したがって、ロシアをイギリスの後発国と単純に考えてロシアの工業化を論じることは誤りである。

以上みてきた塩谷氏のロシアにおける研究を参考にして日本における綿製品についても見ていくことにしたい。

日本における研究もマルクス主義に影響を受けた戦後史学が、70年代以降、次第に批判されるようになる。特にベルリンの壁の崩壊とソビエト連邦の解体はマルクス主義による研究が成り立たないことが明確になった。

日本の工業化についても70年代後半には先に述べたように綿製品の内外の品質差に注目した川勝平太氏によって日本綿業と欧米先進国の綿業とは異なることが主張<sup>(23)</sup>された。氏は、そこからさらに進んで、欧米と異なるアジア木綿文化圏の存在を提唱した。こうした議論から考えれば、これまでの通説が考えていたような日本の工業化は、欧米先進国の後発国としてのみ捉える通説には問題があると思う。

我が国の綿織物の歴史は、戦国時代、16世紀までには普及していたようである。19世紀までにはさまざまな種類の織物が存在した、人々は流行に敏感だったようである。近世の初期において人々の憧れは、絹織物であり、特に生糸を中国から購入するため、膨大な貴金属を我が国から直接中国、あるいは朝鮮を経由して流出している。これを国産化するには、200年以上かかったようである<sup>(24)</sup>。

幕末の開港により、我が国は欧米列強との貿易を開始する。開港により輸入品の首位になったのは、綿織物であるが、その中でも、厚地布しか存在しなかった我が国では番手の高い薄地布の生産は、不可能であったため薄地布である金巾が大量に輸入された。我が国の幕末の開港は1859年7月であるが、65年には横浜、函館、長崎の三港から我が国に輸入された綿織物については、関税が掛かるので、当時としては正確な貿易統計が存在しているのでその概要を知ることができる。合計、100万9,655反の綿織物が輸入されている。そのうち生地のみである金巾は、45,751反であり、捺染された更紗は、16万3,537反、縞木綿の唐棧は、15万5,840反<sup>(25)</sup>である。膨大に輸入綿製品が流入したのにもかかわらず我が国の綿織物業にそれほど打撃をあたえなかったようである。これは、川勝氏が指摘したように我が国在来の綿織物とは、品質が大いに異なっていた<sup>(26)</sup>ためである。こうした綿製品が我が国に流入した理由は、かつて考えられていたように産業革命後の欧米先進国の製品は機械で製造さ

れていたので安価であったため我が国の織物市場に進出したと単純に考えることはできない。この理由は、むしろ「憧憬」と考えるべきであると思う。我が国は田村均<sup>(27)</sup>氏が指摘しているように幕末開港によって染色しやすい毛織物も流入した。これは、そのまま使用したのではなく、和服にとり入れることで、新製品として需要を生み出していた。また、織物業の市場はかなり成熟していたと見做すことが妥当である。

しかし、綿織物が大量に流入した理由は、江戸時代からこうした綿織物は好まれていたようである。江戸時代、輸入された縞木綿は唐棧と呼ばれ、それを真似た国産の縞木綿、和唐棧とは、品質に大いに差があった。「主人と使用人」の差と言われるくらい激しく品質が異なっていた。これは染色技術に差があったためである<sup>(28)</sup>。

多くの我が国の歴史家に影響を与えた民俗学の大家、柳田國男は、著名な『木綿以前の事<sup>(29)</sup>』で中世から近世にかけて庶民の衣類が麻から木綿への代替を著しているがそれによって「色々な染が容易なこと<sup>(30)</sup>」、「どんな派手な色模様にも染まった<sup>(31)</sup>」としている。柳田は、木綿は容易に様々な色に染まるものであると考えていたようであり、「今まで眼で見るだけのものと思っていた紅や緑や紫が、天然から近よって来て各人の身に属するものとなった<sup>(32)</sup>」とも述べているように木綿は江戸時代においても赤や紫など明るく鮮やかな色に染めることが可能であると考えていたようである。

しかし、近年このことに対して染色家の吉岡幸雄<sup>(33)</sup>氏は、江戸時代では、天然の繊維の中で、絹や毛織物などの動物繊維は、紅・茜・紫などの華やかな色彩に染めることができるが、木綿や麻のような植物性繊維はよく染まらずいったん染まってもすぐに、色が褪せてしまう。天然染料を用いるしか染色手段がなかった江戸時代においては、綿織物を鮮やかな色に染め上げることは、日本国内では、不可能であった。

吉岡氏によると柳田國男は、木綿が天然染料でも染まるものであるとする現代人と同様な誤解をしていたと指摘している。

しかし、唐棧と呼ばれる舶来の織物は例外であり、鮮やかな赤い色を江戸時代においても出すことができた。これは、吉岡氏によって「科学以前の科学<sup>(34)</sup>」と評価されているようにインドの周辺で採れるインド茜の塗料を用いて、あらかじめミロバンという茶色の染料で下染し、それを明礬の液につけて、そのアルミ分を十分に吸収させてから茜の染料が煮えたぎったところへ入れて染めるという複雑な方法をおこなうことで、赤色に染めることができたのである<sup>(35)</sup>。これは、江戸時代の人にとっては憧れの製品となった。国産品が真似ようとしてもこの水準に追いつくことは不可能であった。

我が国は幕末の開港によってヨーロッパからの化学染料などを利用することで、唐棧とはほぼ同様な製品を作成することに成功する。田村均氏の研究によって明治10年ごろには、二タ子縞のような製品が開発される<sup>(36)</sup>。これは、細糸の洋糸と化学染料を利用した製品である。江戸時代の唐棧にたいする憧憬がこのような製品を明治の初年までに製造することができた要因であったと考えられる。開港後すぐに洋糸などを用いて和唐棧の改良が試みられ、我が国の嗜好にあうような二タ子縞が早くも明治の初年に開発されたのである。これらは、江戸時代にインド更紗や唐棧に対する憧憬があっ

たからこそ開港からわずかの期間で作製されたのである。鮮やかな赤色を帯びた舶来の綿織物はどうい庶民には手に入らない製品であった。開港を機にいち早く和唐棧の改良がおこなわれ化学染料を用いて鮮やかな色合いの小倉唐棧といわれる和唐棧が明治10年代に我が国流行した<sup>(37)</sup>ことが知られている。これは、まさに江戸時代の庶民の憧れが、化学と洋糸の導入によって庶民も身にまとうことが可能になったのである。

巨匠、柳田國男を誤解させたように木綿織物は鮮やかな色彩に染色できるようになり、明治前期の我が国に流行したのである。また、開港を機に高機が利用されたのも細糸である輸入糸を織布しやすいためであったと田村氏は指摘している<sup>(38)</sup>。

輸入綿織物の輸入が減退していくのはこのように国産の小倉唐棧や二タ子縞などに輸入代替化されたためである。しかし、それらの原材料には洋糸が使用されていたため輸入糸の輸入がおこなわれたと考えるべきであろう。先にみたように塩谷昌史氏の研究で明らかになったようにロシア綿織物とイギリス綿織物は、競合しない市場が存在する。また、我が国の綿業も同様に、江戸時代の憧れあった唐棧などが開港することにより流入した。これは、化学染料や洋糸を使用することによって可能であった。

かつて論争となったこの時代の内外綿布の競合関係<sup>(39)</sup>は、こうした脈絡で理解するべきである。我が国は後発国として工業化が開始されたとする通説的な理解は一面的であり、インド更紗への憧れこそが我が国を工業化へ導いていった要因になるのではないかと思う。

このようにグローバルな視野<sup>(40)</sup>を持って我が国綿織物業の発展の契機を捉えていく必要性があるのではないかと思う。

## 注

- 1 速水融氏は、宗門帳を用いた歴史人口学の研究などで高い評価のある著名な経済史家である。多くの業績があり、2009年に文化勲章を受章した。また、速水氏は、産業革命をおこなって工業化したイギリスは、資本集約的であるのに対して日本は労働集約的な勤勉革命をおこない工業化を進めた（速水融「経済社会の成立とその特質」、『新しい江戸時代史像を求めて』、東洋経済新報社、1977年などを参照）と日本とイギリスでは、異なった工業化を進めたと主張した。
- 2 アレキサンダー・ガーシェンクロン（Alexander Gerschenkron）（1904～1978年）、ガーシェンクロン氏は、我が国ではキャッチ・アップモデルとして広く知られている。また、ハーヴァード大学で教鞭を採った著名な経済学者である。しかし、絵所秀紀、雨宮明彦、峯陽一、鈴木義一訳『後発工業国の経済史－キャッチアップ型工業化論－』、ミネルヴァ書房、2005年などの論文集の訳本はあるが、あまり、邦訳された書物が少ない。近年、彼の学説を解りやすく紹介している玉木俊明氏も「ガーシェンクロンの通説的理解が現実の彼の主張とは違っているように感じられる」（玉木俊明『先生も知らない経済の世界史』、日経プレミアシリーズ、2017年、187頁。）というようにロシア系のアメリカ人であるガーシェンクロン氏は、後発国のキャッチアップ理論よりも母国ソビエトに関して後発国である故に後発の利益を得ているので経済成長のスピードが速いことを述べたかったようである。
- 3 中村尚史『海を渡る機関車－近代日本の鉄道発展とグローバル化』、吉川弘文館、2016年、1～2頁。
- 4 杉原薫氏の研究については、杉原薫『アジア間貿易の構成と構造』、ミネルヴァ書房、1996年を参照。
- 5 川勝平太氏の研究は川勝平太『日本文明と近代西洋』、日本放送出版会、1991年、川勝平太『経済史入門』、日本経済新聞社、

2003年などに纏められている。

- 6 Alexander Gerschenkron , Economic Backwardness in Historical Perspective, The Belknap Press of Harvard University, Cambridge ,Massachusetts ,1962 .なお、ガーシェンクロン氏を著名とした「歴史的視野から見た経済的後進性」の初出は、1952年。
- 7 中川敬一郎「後進国の工業化過程における企業者活動ーガーシェンクロン・モデルを中心として」、『経済論集』28－3、1962年。早くも60年代初頭、我が国に中川敬一郎氏によって紹介されている。
- 8 渡辺利夫『開発経済学』、日本評論社、1986年あるいは、渡辺利夫『現代韓国経済分析』、勁草書房、1982年。
- 9 末廣昭『キャッチアップ型工業化論ーアジア経済の奇跡と展望』、名古屋大学出版会、2000年。
- 10 以下、ソビエト崩壊後、新しい視覚で精力的に研究をしている塩谷昌史氏の著書（塩谷昌史『ロシア綿業発展の契機』、知和書房、2014年）を参考にした。塩谷氏は、本文でも述べたようにロシアの綿業の発展は、通説のようにイギリスの後発国と捉えることに疑問を投げかけている。
- 11 同前 5－6頁。12 同前 29－31頁。13 同前 54頁。14 同前 37頁。15 以下54－60頁。
- 16 塩谷氏は、捺染工程についても重視しており、同書でも多くの記述がある。これまでの織物業の研究では、紡績工程や織布工程についてのみ取り上げている研究がほとんどであったが、織物における捺染・染色は重要であると思う。
- 17 52頁。18 同前 205頁。19 同前 222頁。20 228頁。21 175－177頁。22 228－229頁。
- 23 川勝平太 前掲『日本文明と近代西洋』
- 24 田代和生「17・18世紀東アジア域内交易における日本銀」、浜下武司、川勝平太『新版 アジア交易圏と日本の工業化』、藤原書店、2001年。「養蚕技術の克服に挑んだ日本であるが、18世紀後半まで持ち越された」（同前 154頁）というように中国の生糸を国産糸に代替するのに長い年月がかかったのである。これも舶来の製品への憧れである。そのため、膨大な貴金属を海外に流出させた。
- 25 山脇悌二郎『辞典 絹と木綿の江戸時代』、吉川弘文館、2002年、124－125頁。
- 26 川勝平太「明治前期における内外綿関係品の品質」、『政治経済学雑誌』250・251合併号、1977年などを参照。
- 27 田村均『ファッションの社会経済史』、日本経済評論社
- 28 小笠原小枝「輸入反物が語るインド更紗の盛衰」、永積洋子編『「鎖国」を見直す』、山川出版を参考にした。なお、小笠原小枝氏は（小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』、至文堂、1998年）を編纂するなどの業績がある。
- 29 柳田國男（1875～1962）の著名な『木綿以前の事』、岩波書店、1979年は、永原慶二氏（永原家慶二『新木綿以前の事』、中央公論社、1990年）や武部善人氏（武部善人『綿と木綿の歴史』、御茶ノ水書房、1989年）などの著名な歴史家に影響を与えた。
- 30 同前 13頁。31 同前13頁。32 同前 13頁。
- 33 吉岡幸雄氏は、『日本の色辞典』、紫紅社、2000年を編纂したすぐれた染色家である。
- 34 吉岡幸雄「藍と茜ー日本人と木綿との出会い」、『別冊太陽 木綿と古裂』、平凡社、1996年、34－5頁
- 35 同前 35頁。
- 36 田村 前掲 87－92頁。37 同前 110－115頁。38 同前 109頁。
- 39 高村直助「明治維新の“外圧”をめぐる一、二の問題」、『社会科学研究』39－4、1987年。高村氏はこの論文で白木綿の生産量を減らしている機業地が多いことを挙げ、川勝氏を批判している。しかし、本稿でもみたようにロシアにおける塩谷昌史氏の研究で、ロシア更紗はイギリス綿織物との競合関係がないように幕末・明治前期の我が国綿織物も同様な理由で、イギリス綿織物業と競合しなかったと考えるべきであると思う。
- 40 鎌田由美子氏が近年、精力的に研究しているように南インド産の絨毯が江戸時代にオランダ人によって我が国もたらされ、今日でも祇園祭の懸装品として用いられていることを実証したようにインドからの鮮やかな絨毯は、江戸時代の人々を魅了したであろう。（鎌田由美子『絨毯が結ぶ世界ー京都祇園祭インド絨毯への道ー』、名古屋大学出版会、2016年）